

令和元年6月20日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03414

研究課題名(和文)「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相

研究課題名(英文) Aspects of Tibeto-Burman Languages through analysis of the Directional prefixes

研究代表者

荒川 慎太郎 (Arakawa, Shintaro)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：10361734

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,300,000円

研究成果の概要(和文)：チベット・ビルマ語派に属する諸言語には、動詞に「方向接辞」が付加されて、動作の方向を表す現象が見られるものがある。本研究の目的は、この方向接辞を持つ言語の、主な国内研究者が共同し、各言語の方向接辞の機能と類型を比較考察することだった。各言語の方向接辞に関する研究を深化させ、同語派における方向接辞の類似点・相違点を明確にした。最終年度に開催した国際ワークショップと、その内容を論文化したものを編集した『方向接辞の機能』などが成果となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語の「書き『上げる』」や、英語の「finish “up”」のように、「方向を示す表現」が動詞句の一部を構成すること、またその表現が「完了を示す表現」に転じたりすることが知られている。本研究では、チベット・ビルマ語派という言語グループの中で「動詞句の中に方向接辞という要素を持つ言語」の研究者が参集し、各言語でさまざまな振る舞いを見せる「方向接辞」の諸相を明らかにした。同語派の歴史的な発展の研究、及び他の語族における同種の接辞の研究に寄与することが期待できる。

研究成果の概要(英文)：Some languages belonging to Tibet-Burman language group have "the directional affix (mainly, prefix)" which is added to a verb, and expresses a direction of the movement. The purpose of this project is a comparative study of the function and type of the prefix of each language, by researchers in Japan. We deepen the study on directional prefixes of each language and made the similarity or difference of such prefixes clear. We produced the international workshop on the topic in the final year and we will publish the volume titled "The functions of the directional prefix in Tibeto-Burman" in 2019.

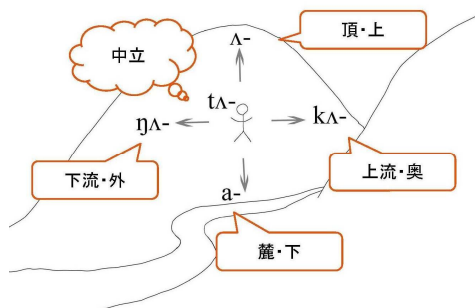
研究分野：人文学

キーワード：言語学 チベット・ビルマ語派 西夏語 動詞句 形態論 方向接辞

1. 研究開始当初の背景

チベット・ビルマ語派(以下、TB 語派)は、東アジア及び東南アジア大陸部に広く分布する言語集団である。山岳・山地に住する民族によって話される言語も多い。当該地域において、話者の動作が山・水源とどのような位置関係にあるのかは重要な情報であるため、動詞に付加され「動作の方向」を示す要素「方向接辞」が発達したと考えられていた。

ダバ語の方向接辞の例



方向接辞は、時間的な方向すなわち「過去・未来」といった時制にも関係する場合がある。

接辞の中でも「接頭辞」タイプが一般的だが、A:動詞に先行する場合と、B:動詞と助動詞(あるいは動詞述部)の間、つまり述部要素に先行する場合がある。本課題で扱う言語から例を示す(共に音表記は簡略化した)。本研究ではどちらのタイプも「動詞句内の接辞」として研究対象とする。

例) A 西夏語 **接頭辞 - 動詞語幹(-助動詞)** *wI-we* 「あちらに行け」

B ジンポー語 **動詞語幹 - 接頭辞 - 述部要素** *sa s-it* 「あちらに行け」

なお TB 語派でも、チベット語やビルマ語のような大言語には方向接辞が見られない。近年の研究で、現代の、TB 語派少数民族語の方向接辞の音形や機能が明らかになると、ほぼ千年前の西夏語の方向接辞とも密接な関係があることがわかった。このような背景の下、TB 語派方向接辞の歴史的発展に関して、諸言語の比較検討が求められていた。

2. 研究の目的

1. のような背景の下、本研究の目的は、TB 語派に属する新旧各言語の研究者が共同で、方向接辞の機能と類型を比較考察し、同語派の史的変遷の一端を明らかにすることであった。国際的にも周知のことだが、日本国内には多くの、TB 語派に属する言語の研究者がおり、本課題に該当する「方向接辞を有する言語」の専門家をメンバーとして招集することができた。具体的には、西夏語(荒川慎太郎・代表者)、ムニャ語(池田巧)、ダバ語(白井聡子・分担者)、ギャロン語(長野泰彦)、ジンポー語(倉部慶太・分担者)、チン語(大塚行誠)である。各言語の地理的な関係は以下の地図のようになる。



西夏語は 11~13 世紀に中国西北部に栄えた西夏国の言語である。現在死語となっているものの、「西夏文字」による文献が数多く残り、言語調査が可能である。現在四川省で話されている、ムニャ語が、系統的に近いのではないかと推測されてきた。

こうした陣容で、個々人のデータの集積を比較検討し、方向接辞ごとの類似点・相違点を明らかにすることで、TB 語派の史的変遷の一端を明らかにすることが目的であった。

3. 研究の方法

代表者の専門とする西夏語をはじめ、各言語の「方向接辞」は十分に記述されていなかった。加えて、言語同士を比較検討するという試みもなされていなかった。そこで、各人が個別言語の方向接辞について、用例を集めて個別に研究・記述する一方、西夏語とムニャ語、ダバ語とギャロン語、ジンポー語とチン語など、地理的・類型的に近いとされる言語でペアを組んで、比較対照研究を行なった。

各人が言語調査を継続するとともに、毎年度定期的に研究会・ワークショップで集い、発表質疑を通して研究を深化させた。

#### 4. 研究成果

本研究の成果を、(1) 国内外のワークショップの開催、(2) 成果刊行物の編集、に分けて述べ、総括する。

##### (1) 国内外のワークショップの開催

初年度、2017年1月に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所にて、東京外国語大学 AA 研「頭脳循環プロジェクト」・方向接辞科研共催国際ワークショップ Workshop (KAKENHI Project “Aspects of Tibeto-Burman Languages through analysis of the Directional prefixes”): Directional prefix of Tibeto-Burman languages を開催した。荒川・池田・白井・長野の4名が発表、海外からチベット語の研究者(ロンドン大学 SOAS, Nathan Hill 博士)もゲストとして加わり、意見を交換した。

2年度、2017年11月、立命館大学で開催された日本言語学会第155回大会(審査有)にて、ワークショップ「チベット・ビルマ諸語における「方向接辞」の諸相」を開催、西夏語とムニャ語、ダバ語とギャロン語、チン語とジンポー語それぞれを対照比較した研究を発表し、会場から意見を得た。

最終年度、2019年3月に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所にて、国際ワークショップ Workshop (KAKENHI Project “Aspects of Tibeto-Burman Languages through analysis of the Directional prefixes”): Directional Prefix in Tibeto-Burman languages (2) を開催し、上記の内容を深化させ英語化した内容を発表、海外からのゲスト2名(Lai Yunfan, Zhang Shuya)から他のTB語派の方向接辞の情報を得るとともに、方向接辞に関する意見交換を行なった。

##### (2) 成果刊行物の編集

最終年度に開催した国際ワークショップの内容を論文化したものを編集した成果刊行物、『シナ=チベット系諸言語の文法現象3 方向接辞の機能』を準備中である。上記(1)の海外ゲストからの寄稿など、当初予定より拡大した内容となったため、最終年度中の刊行は成らなかったが、京都大学人文科学研究所から2019年度中に刊行予定である。

TB語派のうち方向接辞を持つ言語の、主な国内研究者が共同し、各言語の方向接辞の機能と類型を比較考察し、各言語の方向接辞に関する研究を深化させ、同語派における方向接辞の類似点・相違点を明確にした。具体的には、いわゆる「方向接辞」は、1)一見、北方の言語が複雑かつ多種のようだが、南方のチン語周辺言語からそれは一概には言えないこと、2)西夏語のように方向接辞が義務的ではないもの、ムニャ語のように義務的に動詞句に現れるなど、言語によって重要度に違いがあること、3)「方向」といっても物理的・地理的な方向に限られるものではないこと、などユニークな各種特徴を明らかにすることが出来た。今後のTB語派の歴史的・類型的研究に有効なものと信じる。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計17件)

荒川 慎太郎、西夏文法華経と西夏語の研究 - ロシア・米国所蔵資料にもとづいて、東洋学術研究、査読無、58巻1号、2019、pp. 285-298

荒川 慎太郎、西夏語の使役について、シナ=チベット系諸言語の文法現象2：使役の諸相(池田 巧編) 査読無、京都大学人文科学研究所、2019、pp. 135-147

池田 巧、ムニャ語の自他動詞と使役構文、シナ=チベット系諸言語の文法現象2：使役の諸相(池田 巧編) 査読無、京都大学人文科学研究所、2019、pp. 115-134

長野 泰彦、嘉戎語莫拉方言の使役表現、シナ=チベット系諸言語の文法現象2：使役の諸相(池田 巧編) 査読無、京都大学人文科学研究所、2019、pp. 83-98

白井 聡子、ダバ語における自他動詞対と使役、シナ=チベット系諸言語の文法現象2：使役の諸相(池田 巧編) 査読無、京都大学人文科学研究所、2019、pp. 99-98

Arakawa Shintaro, “Once again, on the “dual” suffix of Tangut”, Proceedings of the 51st International Conference on Sino Tibetan Languages and Linguistics (2018), 査読無, 2018, DOI: <http://hdl.handle.net/2433/235260>

荒川 慎太郎、西夏語の双数接尾辞について、ユーラシア諸言語の多様性と動態(林徹ほか編) 査読有、ユーラシア言語研究コンソーシアム、2018、pp. 69-83

Shirai Satoko, “An analysis of the aspect-making function of directional prefixes in nDrapa”, ユーラシア諸言語の多様性と動態(林徹ほか編) 査読有、ユーラシア言語研究コンソーシアム、2018、pp. 405-420

荒川 慎太郎、チベット・ビルマ諸語における「方向接辞」の諸相、日本言語学会第155回大会予稿集、査読無、日本言語学会、2017、pp. 334-335

荒川 慎太郎・池田 巧、西夏語とムニャ語の方向接辞、日本言語学会第155回大会予稿集、査読無、日本言語学会、2017、pp. 336-341

白井 聡子・長野 泰彦、ダバ語とギャロン語における方向接辞の対照、日本言語学会第155回大会予稿集、査読無、日本言語学会、2017、pp. 342-347

大塚 行誠・倉部 慶太、ティディム・チン語とジンポー語における方向接辞の対照、日本言

語学会第 155 回大会予稿集、査読無、日本言語学会、2017、pp. 348-353  
荒川 慎太郎、敦煌石窟西夏文題記銘文集、敦煌石窟多言語資料集成（松井 太・荒川 慎太郎編、査読無、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2017、pp. 241-333  
Kurabe Keita, “Jinghpaw”, *The Sino-Tibetan Languages* (2<sup>nd</sup> Edition)(G. Thurgood and R. LaPolla eds.), 査読無, Routledge, 2017, pp. 993-1010  
Nagano Yasuhiko, “Cogtse rGyalrong”, *The Sino-Tibetan Languages* (2<sup>nd</sup> Edition)(G. Thurgood and R. LaPolla eds.), 査読無, Routledge, 2017, pp. 993-1010  
Arakawa Shintaro, “Re-analysis of the “Double prefix” in the Tangut Verb phrase”, 西夏学輯刊、査読無、1 巻、2017、pp. 55-61  
荒川 慎太郎、大英図書館所蔵西夏文「礼賛文」断片について—黒水城出土チベット語文献中の資料 K.K.II.0303.a—、京都大学言語学研究、査読有、35 号、2016、pp. 195-216

〔学会発表〕(計 18 件)

Arakawa Shintaro and Takumi Ikeda, “Directional prefixes in Tangut and Munya”, Workshop (KAKENHI Project “Aspects of Tibeto-Burman Languages through analysis of the Directional prefixes”): Directional Prefix in Tibeto-Burman languages, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2019

Shirai Satoko and Yasuhiko Nagano, “Grammaticalization of directional markers in nDrapa and Situ rGyalrong: A contrastive study”, Workshop (KAKENHI Project “Aspects of Tibeto-Burman Languages through analysis of the Directional prefixes”): Directional Prefix in Tibeto-Burman languages, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2019

Otsuka Kosei and Keita Kurabe, “The cis- and translocative prefixes in Tiddim Chin and Jinghpaw”, Workshop (KAKENHI Project “Aspects of Tibeto-Burman Languages through analysis of the Directional prefixes”): Directional Prefix in Tibeto-Burman languages, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2019

Arakawa Shintaro, “Study of the Tangut language in the Lotus Sutra, preserved in Princeton, USA”, Rencontre de Tangoutologie, Artois university, Arras, France, 2018 年  
白井 聡子「チアン諸語における方向接辞の地理言語学的分析」, 一般言語学研究会 11 月月例会, 筑波大学, 2018

Arakawa Shintaro, “Once again, on the “dual” suffix of Tangut”, The 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, 京都大学吉田南キャンパス, 2018

Arakawa Shintaro, “Linguistic researches of Tangut, based on IOM Collection, International workshop: Studies of Historical Documents from Central Asia, based on IOM Collection”, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2018

荒川 慎太郎「チベット・ビルマ諸語における「方向接辞」の諸相」, 日本言語学会第 155 回大会, 立命館大学衣笠キャンパス, 2017

荒川 慎太郎・池田 巧「西夏語とムニャ語の方向接辞」, 日本言語学会第 155 回大会, 立命館大学衣笠キャンパス, 2017

白井 聡子・長野 泰彦「ダバ語とギャロン語における方向接辞の対照」, 日本言語学会第 155 回大会, 立命館大学衣笠キャンパス, 2017

大塚 行誠・倉部 慶太「ティディム・チン語とジンポー語における方向接辞の対照」, 日本言語学会第 155 回大会, 立命館大学衣笠キャンパス, 2017

Arakawa Shintaro, “Re-analysis of the Tangut suffix for ‘dual’”, Recent Advances in Tangut Studies, SOAS, London, UK, 2017

Arakawa Shintaro, “Directional prefixes in Tangut”, Workshop (KAKENHI Project “Aspects of Tibeto-Burman Languages through analysis of the Directional prefixes”): Directional prefix of Tibeto-Burman languages, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017

Ikeda Takumi, “Directional prefixes in Munya”, Workshop (KAKENHI Project “Aspects of Tibeto-Burman Languages through analysis of the Directional prefixes”): Directional prefix of Tibeto-Burman languages, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017

Shirai Satoko, “Directional prefixes in nDrapa”, Workshop (KAKENHI Project “Aspects of Tibeto-Burman Languages through analysis of the Directional prefixes”): Directional prefix of Tibeto-Burman languages, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017

Nagano Yasuhiko, “Directional prefixes in rGyalrong”, Workshop (KAKENHI Project “Aspects of Tibeto-Burman Languages through analysis of the Directional prefixes”): Directional prefix of Tibeto-Burman languages, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017

Arakawa Shintaro, “On Two Tangut Fragments “praising Buddha” preserved in the

British Library”, 内蒙古大学首届北方民族古文字国际学术研讨会, School of Mongolian Studies, Inner Mongolia University, Hohhot, China, 2016

荒川 慎太郎「党項語語法：党項語動詞前綴与趨向範疇」, 第二届西夏文献解读研讨会, 中国, 银川, 北方民族大学, 2016

〔図書〕(計4件)

池田 巧、京都大学人文科学研究所、シナ＝チベット系諸言語の文法現象2：使役の諸相、2019、242

長野 泰彦、汲古書院、嘉戎語文法研究、2018、475

荒川 慎太郎、創価学会・東洋哲学研究所、プリンストン大学図書館所蔵西夏文妙法蓮華經—写真版及びテキストの研究、2018、270

松井 太・荒川 慎太郎編、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、敦煌石窟多言語資料集成、2017、522

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：白井 聡子

ローマ字氏名：(SHIRAI, Satoko)

所属研究機関名：筑波大学

部局名：人文社会系

職名：学振特別研究員

研究者番号(8桁)：70372555

研究分担者氏名：倉部 慶太

ローマ字氏名：(KURABE, Keita)

所属研究機関名：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

部局名：アジア・アフリカ言語文化研究所

職名：助教

研究者番号(8桁)：80767682

(2)研究協力者

研究協力者氏名：池田 巧

ローマ字氏名：(IKEDA, Takumi)

研究協力者氏名：長野 泰彦

ローマ字氏名：(NAGANO, Yasuhiko)

研究協力者氏名：大塚 行誠

ローマ字氏名：(OTSUKA, Kosei)

研究協力者氏名：佐藤 貴保

ローマ字氏名：(SATO, Takayasu)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。